

開催地名	広島県尾道市
開催日時	令和8年1月31日(土) 10:00 ~ 12:00
開催場所	尾道市防災センター
語り部	菅原 淳一(宮城県利府町)
参加者	尾道市防災士ネットワーク関係者 19名
開催経緯	我々の地区には、10年前に実施した防災訓練には約400人が参加し、ヘリコプターが出動する大規模訓練だったが、近年の訓練については100人程度と参加率が低下している。この背景として、実際に災害が発生していないことに対して、徐々に危機感が薄れてしまい、防災意識が低下しているのではないかと考えている。南海トラフ地震は約30万人の犠牲が出ると想定されているため、地域一体となり防災訓練・防災活動をすることが大切だと考えている。今回の講演をきっかけに今後の活動に活かしていきたい。
内容	<p>◇はじめに</p> <p>今年、東日本大震災から丸15年の月日が経った。当時6歳だった愛梨さんも生きていれば大学3年生の歳になる。活動する中で、地域の連携無しでは防災はつながってはいかない。東日本大震災を経験して、防災は備えがないと命を落とすという怖さを身に染みて感じた。対岸の火事というのは尾道市だけの問題ではない。全国各地で遺族の声を聞き、このような活動で背中を押すことによって地域の防災が活発になればと活動を続けている。</p> <p>(1) アイリンブループロジェクト設立までの経緯</p> <p>2011年3月11日、東日本大震災発生当時、防災警報が発令されているにもかかわらず、幼稚園バスが保護者の元に園児を送り届けるために、子供5人を乗せて高台の幼稚園から沿岸部に向けて走り出した。結果的に5人の子供全員が犠牲になったが、運転手は今でも生きている。幼稚園児は津波の溺死で亡くなったわけではなく、発生から約10時間後の海上で発生した火災により亡くなった。</p> <p>その犠牲者の1人に佐藤愛梨さんという子供がいる。2015年の春、母の美香さんが彼女の最期の場所に真っ白の花、フランス菊がたくさん咲いているのを発見した。ちょうどそのあたりは津波が来ていた場所で、塩害の影響で植物が育たない場所であったが、その1輪の花を自宅に持ち帰り育てたところ、一度は枯れかけた花が奇跡的に新しい芽を出し、命を繋ぎ、現在では日本全国各地で防災を啓発する花として植栽されている。私の本職が芸術家であるという経緯もあり、愛梨ちゃんの写真を描かせてもらいNHKを通じて母の美香さんに送った。大変喜んでいただき、それ以来から連絡を取り合うようになった。2015年</p>

2月から3.11の悲劇を繰り返さない防災リレー「アイリンブループロジェクト」を愛梨さんの母・美香さんと設立し活動を始めたのである。

◆アイリンブループロジェクトの活動内容

・2016年10月に「ふうせん ふふふ そら、ららら」という15分の短編映画を愛梨ちゃんをテーマに制作した。

・2017年から現在進行形で、花で忘れない防災リレーと称して、県内外からスタートし現在では20都県・110カ所以上、参加延べ人数17000名以上の講演会活動を行っている。コロナ禍で講演会はやむなく休止状態ではあったが、地道に活動は続けていた。

(2) 地域連携型避難訓練（防災人の結集）

2020年はオリンピックイヤーで、私の住む宮城県利府町はオリンピック会場だったこともあり、自宅近くの郵便局長と何かイベントを実施しようと計画をしていく中で、その局長が防災士の資格を持っていることを知った。

現在、全国1.9万人いる郵便局長のうち、約75パーセントが防災士の資格を取得しているが、ほとんどの人が地域に還元できていないことが判明した。せっかくだからと、2021年4月に危険箇所を探す「屋外防災散歩会」を実施しイベントを開いた。その後、幼稚園と保育園で地域連携の避難訓練ができないかと宮城県塩竈市、多賀城市と津波の被害を受けた町で防災会議を開き、偶然にも、そこに塩竈市のわだつみ保育園の関係者が見えており、2021年10月にその保育園で避難訓練を行うことになった。多賀城市の小学校でも地域の協力のもと避難訓練を実施し、地域連携の避難訓練活動を今年までに約30ヶ所で実績を重ねてきた。

避難行動における役割分担や、命を繋ぐ避難の工夫は必要不可欠である。想定として幼稚園・保育園には必ず避難ルートがあるが、そのルートは1ヶ所しかない。もしそのルートが崖崩れで通れなくなった場合はどうするか、最悪の状態も想定して複数の選択肢を作っておくことが大切である。そして避難時には先発隊・本隊・後方隊の大きく3つに分けて避難することが大切である。先発隊には地域の人と保育士を配置し、本当にこのルートで避難できるかを確認してもらおう。そしてその状況を後方隊にトランシーバーで報告する。安全確認ができれば、本隊が同じルートを辿って避難する。そして後方隊も同じルートを辿り、取りこぼしが無いか列になって確認しながら移動する。避難訓練は参加する子どもたちだけではなく、地域の皆さんみんなの命が助かるための取り組みであり、普段支援を求める高齢者が助けられる側から助ける側になってい

る。他にも愛梨さんの母である佐藤美香さんが、紙芝居や愛梨さんのお花の植栽活動などを通じ、子供たちに防災について関心を持ってもらうためのイベントを行っている。こうした活動は幼稚園と保育園の園児が、初めて防災の体験をする場所になる。色んな防災への取り組みを経て日常で繋がり、地域連携から派生する顔の見える関係性づくりが防災活動には無くてはならないものであり、それが小さな命を守る手段になることを痛感した。

(3) 多賀城市の取り組みと私たちの活動

運営側の私たち（一般社団法人 Bird 's-eye=アイリンブループロジェクト）と多賀城市がそれぞれの強みを活かした避難訓練活動をしている。我々は避難訓練の全体企画や郵便局長との調整、多賀城市は幼保施設への避難訓練声掛け、実施幼保施設との調整、関係者の協力企業や学校との調整を行い、市民活動サポートセンターは町おこし協力隊、地域住民や町内会などの地域団体、社協などとの調整を行いながら、幼保施設が自立して地域連携避難訓練ができるよう継続的にサポートしている。避難訓練実施前には他の幼保施設の避難訓練を見学して、実施後は避難訓練と一緒に実施した地域や企業、団体や他の保育園を交えて避難訓練の振り返りを実施することで、幼保施設と地域などの繋がりを強化させつつ、防災力を向上させている。

災害は晴れの時のみに起こるものではなく、雨の降る時でも合羽を着て園児のカートを押さないといけない状況になる。風の吹いている時など天候が悪い時にも地震は発生する。そういった中でも発揮できる避難行動のノウハウを「防災リーダー体験プログラム」を開催して、防災リーダーや候補生に向けて学ぶ機会を提供している。

(4) 幼稚園と保育園

幼稚園と保育園には管轄の違いもあるが防災意識について温度差がある。幼稚園は年に2回以上、避難訓練を行えばいいという認識であるが、保育園は毎月訓練を実施しており、愛梨さんが命を落としたのは保育園と幼稚園の防災意識について差があるからである。保護者目線では何か指標となる認定制度を作って、評価されるべき保育園や幼稚園があってもいいのではないかと考える。

(5) 利府町の次の担い手

利府町では、2021年から防災士の育成会に力を入れており、最初は数人の小さな集まりから、今では関心ある仲間が徐々に増えて地域防災が活性化している。防災リーダーの育成防災士の資格を取得する際、金額面の補助をするなどのおかげか、2024年から23人の防災士が集まって意見を出し合い、現在では2

年で14名の防災士が誕生（内2名は中学1年生と小学5年生）して防災士の資格を取得している。若い世代の防災士育成を目指して今も試行錯誤しながら普及活動に努めている。

(6)尾道市防災ネットワークの課題

・土砂災害警戒区域が2,800箇所もの指定数があるにも関わらず、実際に住民が避難行動を取るまでに至らないことが多い現状。

尾道市だけではなく、どこの地域でも同じことが言えるのだが、防災意識について一人一人の意識改革をする必要がある。家庭内から防災意識を変える試みとして、親子で受講できる防災士育成プログラムを各地で実施するなどが挙げられる。他にも防災士資格取得の際の支援の充実化、防災士資格を取得するメリットなどを正しく伝えてあげる。子供の挑戦を行政や学校が密に連携し地域全体で奨励する仕組みを作り、若い時から地域に貢献する経験を積んでもらうことは、今後の人生において大きな自信と実績になり、企業に就職する際にもスキルとして発揮でき、採用の幅が広まるメリットとなり得る。

・南海トラフ地震では、震度6強や津波の到来など甚大な被害が想定されているが、特に過去、大きな地震被害の経験が少ない地域においては危機感が希薄な人が多い。

人間の行動力は単なる知識のみではなく、心が動く時に生まれるものであり、いかに人の心を動かすかが防災行動の鍵となる。遺族や語り部から直接「生の声」「心の叫び」を聞くことで、防災に対する行動力が生まれると考える。また、津波・土砂災害の被害などハザードマップで可視化し、子供たちの命が危険にさらされているという現実を感じてもらうことで、心を強く揺さぶり行動へと繋がる原動力を促す。子供の命を守る視点は、言うなれば危機感を「自分ごと」に変え、地域全体の防災行動を促進することに繋がると考える。

◇最後に

芸術家である私は、アートの力を使って広げる、伝える、命が守られるという新たな取り組みを通して、アートと防災を伝える活動に努めている。この先、幼稚園と保育園の中で避難訓練や防災意識についての格差が無くなることを願って、今後も活動を続けていく。

